

経済教育学会ワーキングペーパーシリーズ
Working Paper Series, The Japanese Society for Economic Education

Working Paper NO. 00003
2024年3月

教材

チューリップ球根産業—自由化以降の需要と供給—

新里 泰孝

経済教育学会
The Japanese Society for Economic Education

教材

チューリップ球根産業—自由化以降の需要と供給—

新里泰孝（元富山大学経済学部）

要約

チューリップ球根は、オランダの圃場において球根の検査を行うこと（隔離検疫の緩和）により、1988年から輸入自由化（市場開放）が始まった。本稿はそれ以降2015年までの国内市場を需要と供給の視点から分析する。生産量、輸入量、消費量に着目すると、この28年間は、第1期1988年～1993年、生産および輸入がともに増加した消費拡大期、第2期1994年～2001年、生産は減少するが、輸入の増大による消費拡大期、第3期2002年～2015年、生産と輸入がともに減少する消費縮小期に分けられる。各期の球根価格の動きは、第1期はおおむね上昇、第2期は下落、第3期は一定であった。このような消費と球根価格の推移を需要曲線と供給曲線のシフト（移動）からみると、第1期は、需要曲線と供給曲線はともに右方シフトするが需要曲線のシフトが大きく、価格が上昇した。第2期は、需要曲線と供給曲線はともに右方シフトするが供給曲線のシフトが大きく、価格が下落した。第3期は、需要曲線、供給曲線とも同程度に左方シフトし、価格は一定であった。本稿ではさらに、需要曲線と供給曲線がシフトした諸要因を考察する。

キーワード：チューリップ、球根、価格、需要曲線、供給曲線

I. はじめに

チューリップ球根は富山県の特産品である。その歴史は、1918年（大正7年）に砺波の水野豊造（ぶんぞう）が水田裏作としてチューリップ栽培を行ったことに始まる¹⁾。販売先は海外を目指し1937年（昭和12年）にアメリカへ3万球の輸出を行った。第2次世界大戦中生産は中止された。戦後生産は復活し、1948年（昭和23年）には輸出を再開した。日本経済の復興・成長とともに全国においてチューリップの消費と生産は盛んになった。砺波市では1952年（昭和27年）にチューリップフェアが開催された。輸出も拡大し1964年（昭和39年）にはチューリップ球根輸出が過去最大の19百万球となった。1973年（昭和48年）には生産量45百万球を記録し、富山県は日本一の球根生産県となった。

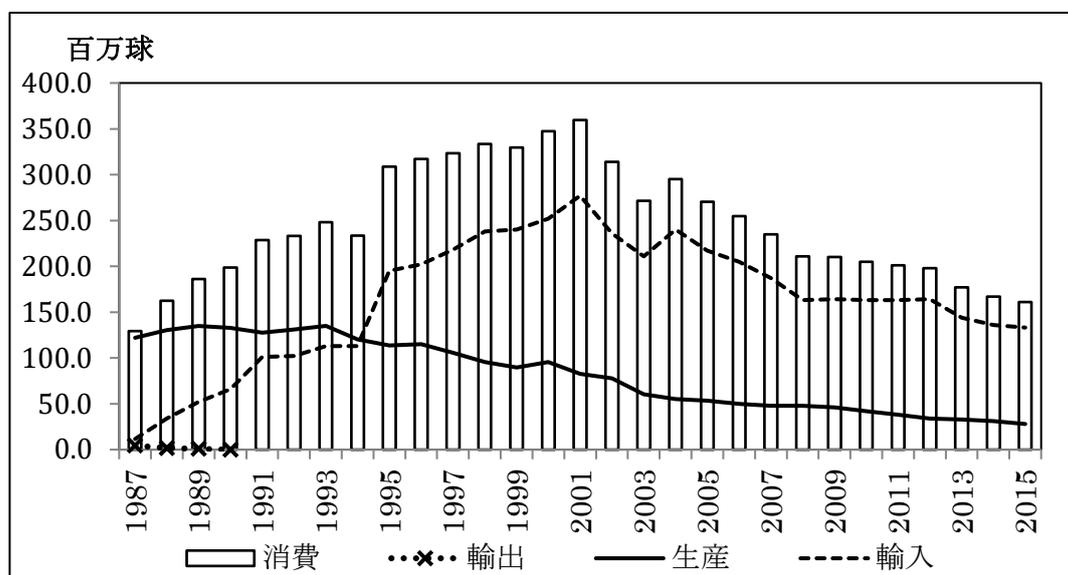
1970年代は円の自由化、円高の影響などにより輸出は減少した。また、石油ショック不況により全国のチューリップ球根生産は大きく減少した。しかし、1980年代は日本経済の安定成長期のもと、特に後半のバブル期には、全国的に球根の消費と国内生産が拡大した。1990年の大阪国際花と緑の博覧会を前にオランダから検疫の緩和を迫られ、1988年

に、オランダ国内の圃場において検査をすること（隔離検疫の緩和）により、チューリップ球根市場の輸入自由化（市場開放）が始まった²⁾。

本稿は輸入自由化が始まった1988年以降2015年までのチューリップ球根の国内市場を分析する³⁾。2016年以降については2015年までとほぼ同じ状況であるが、コロナ禍の2020年以降は大きな変化が起きている。そのため、結びにその概説を加えている。

なお、本稿は各種の学校（富山高等専門学校、富山歯科総合学院、富山国際大学、日本大学）での経済学の講義において使用した教材をまとめたものである。コラムとして、「チューリップ球根の流通経路」、「となみチューリップファアとキューケンホフ公園」を補足した。付録に練習問題、演習問題、アクティブラーニングの課題を示している。

II. 生産、輸入、消費、価格



出所：農林水産省『花きの生産・出荷統計』、『花木等生産状況調査』財務省『貿易統計』、富山県『富山の園芸』、富山県「県産チューリップ球根の生産の推移」。

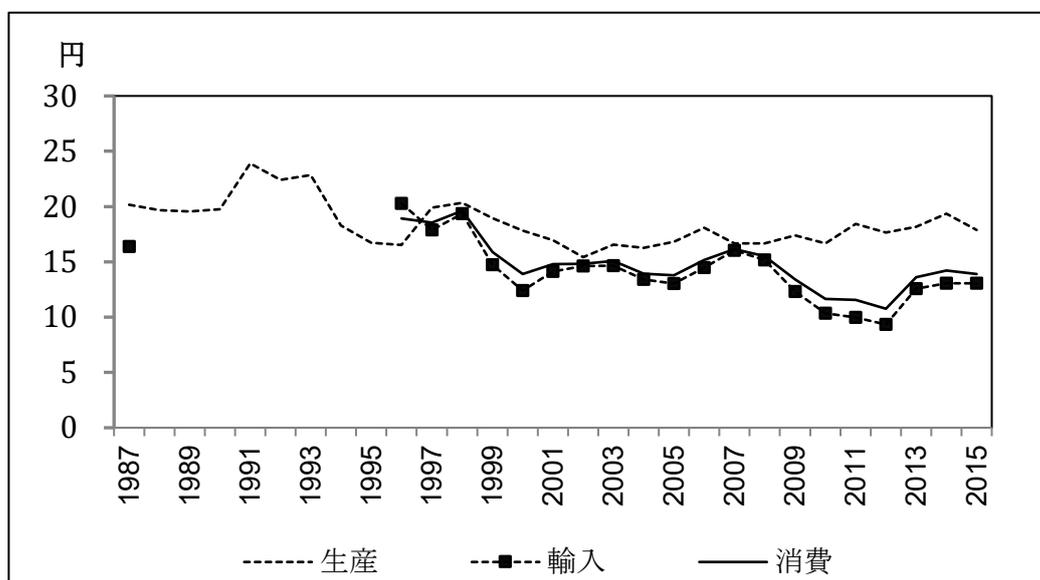
図1 チューリップ球根の生産、輸入、輸出、消費の推移

1988年にチューリップ球根の自由化が始まり、オランダ等から球根輸入が急増した。図1は1987年(自由化前年)から2015年まで、日本のチューリップ球根について、生産量、輸出量、輸入量、消費量(=生産+輸入-輸出)の推移を表わしている。1987年の生産量は122百万球、輸入量は11.6百万球、輸出量は4.4百万球で、消費量は129.2百万球であった。自由化1年目の1988年は輸入量が34百万球と約3倍に増えた一方で、輸出は1.7百万球に減少した。また、生産量は130.3百万球に増加した。その結果、1988年の消費は増加して163百万球となった。自給率(=(国内生産-輸出)÷消費, 数量ベース)は79%である。当時オランダから安い球根が輸入され日本産は駆逐されると予想していたが、む

しろ国内生産量は増加した。その後、多少の変動を経て、1993年に生産量はピークに達した。しかし、その後生産量は継続的に減少した。輸入量は増加傾向が続き、2001年にピークを打ち、その後は減少となった。2015年には生産は28百万球、輸入133百万球、消費161百万球で、自給率17%となった。約30年で消費量はほぼ自由化開始当時の状態に戻り、日本産と外国産でマーケットシェアが入れ替わったことになる。

生産量、輸入量に着目して、輸入自由化以降を大きく3つの時期に分けることができる。第1期1988年～1993年は、生産および輸入が増加した消費拡大期である。第2期1994年～2001年、生産は減少するが、輸入の増大による消費拡大期。第3期2002年～2015年、生産と輸入がともに減少する消費縮小期である。

図2には、生産、輸入、消費（＝生産＋輸入－輸出）の平均価格の推移が示されている。平均生産価格（＝国内生産額÷生産量）は1987年から1990年まではほぼ一定であったが、1991年に急上昇し、1993年までは高水準で推移した。1993年から2001年までにおいては、一時価格が上昇している時期もあるが、概ね下降傾向であった。2001年以降は、国内生産価格は変動しながらもほぼ一定か、むしろ増加傾向にある。輸入価格は1996年から2000年まで低下した。2007年までは輸入価格はほぼ一定で、2007年から2012年まで下降、その後上昇している。図1から分かるように、外国産のマーケットシェアは1994年に50%になり、2004年には80%となった。国産と海外産を合わせた平均消費価格（＝消費額÷消費量）は、輸入価格を少し上回る程度で変動した。

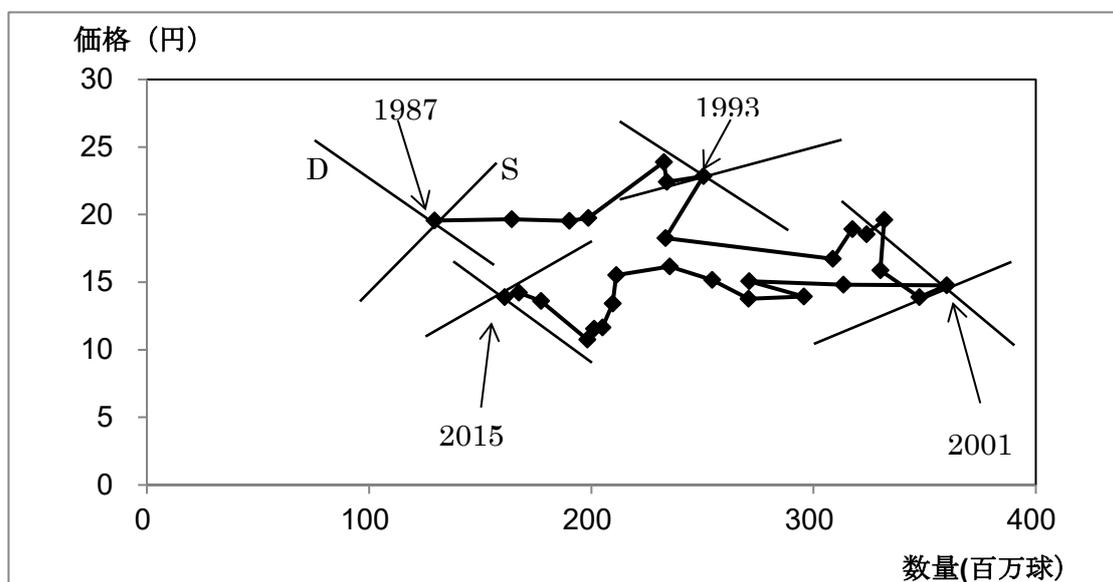


出所：図1に同じ。ただし、1988年から1995年までの輸入価格は得られなかった。

図2 チューリップ球根の生産、輸入、消費の平均価格

Ⅲ. 第1期：1988年～1993年

経済学の基本原理は「需要曲線と供給曲線の交点で価格と取引数量が決定する」というものである。したがって、価格の上昇は、需要増加（需要曲線の右方シフト）または供給減少（供給曲線の左方シフト）によって生じる。



出所：図1に同じ。縦軸はチェリー球根価格（平均消費価格）。横軸は消費量。ただし、1988年から1995年はチェリー球根の輸入価格が得られないので、平均生産価格を球根価格とした。

図3 チェリー球根の需要と供給

図3は縦軸に価格、横軸に消費量を取り、チェリー球根価格（平均消費価格）と消費量の組合せ点の推移をグラフにしたものである。図の各点は需要曲線と供給曲線の交点である市場均衡点であると考えよう。1987年の点は、その年の右下がりの需要曲線(図3のD曲線)と右上がりの供給曲線(S曲線)の交点であり、価格が19.6円であり消費量が129百万球である。この点が1987年の市場均衡点である。1988年に球根の自由化が始まると、安い国際球根価格のもとで輸入が大きく増加する。弾力的な輸入供給曲線が供給要因に加わり、国内市場全体の供給（国内生産+輸入）曲線は右方にシフト（移動）する。この市場供給曲線のシフトは市場価格を低下させる要因である。自由化は輸入を増やし、市場価格を低下させ、国内生産者は価格競争に敗れて生産量が減少させるはずである。しかし、1988年は輸入が増え、消費量は前年に比べ大きく増加したが、生産量も増加した。価格はほとんど低下していない。それは、供給曲線の右方シフトが生じたが同時に需要曲線も右方シフトしたためである。供給曲線の右方シフトと需要曲線の右方シフトが1993年まで続いた。需要曲線の右方シフトが大きければ価格は上昇し、国内生産は増加する。供給曲線の右方シフトはオランダの新しい品種や珍しい品種、オランダのブランド力と低価格を宣伝した輸出攻勢による。需要曲線の右方シフトは当時のバブル経済下の国民所得

の増大、大阪国際花と緑の博覧会（1990年）を契機とする花ブームやガーデニングブームによる花や球根に対する需要増大がその主要因である。

IV. 第2期：1994年～2001年

1993年から2001年までの価格と消費の推移を図3で考えよう。1993年の点を通る需要曲線と供給曲線はそれぞれ右方に移動し、2001年の点で交わっている。消費は増加し価格は低下している。需要曲線の右方シフトよりも供給曲線の右方シフトが大きいためである。価格が安ければたくさん買うのは需要曲線上の動きである。需要曲線に変化がないとき、供給が増えれば価格が低下するのは当然である。90年代後半の日本経済はバブル崩壊後の「失われた10年、20年」と呼ばれる平成大不況の中にあった。所得の減少はチューリップ球根需要を減少させるはずである。しかし、バブル期に形成された住宅造成のもとでガーデニングブームが続いていたので、需要曲線の左方シフトは生じず、むしろ右方シフトが生じた⁴⁾。

この期間、世界価格を上回る日本での球根価格と日本の需要拡大を期待して、オランダの輸出攻勢がますます激しくなり、輸入量が増大し、輸入価格は低下した。このことは輸入供給曲線の右方シフトによる市場供給曲線全体の右方シフトをもたらした。その結果、市場価格も低下した。国内生産者は採算が合わず、球根生産の縮小や中止に追い込まれた。

V. 第3期：2002年～2015年

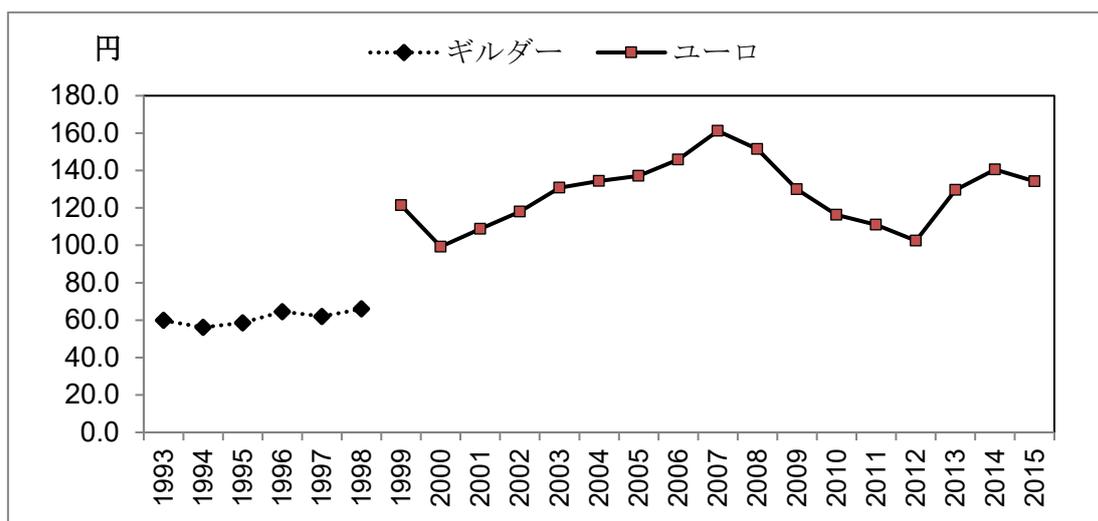
2001年から2015年の消費は図1のように大きな減少が生じた。2001年の消費は360百万球であったが、2015年は161百万球と約4割に縮小した。価格は図2のように、2001年14.8円に対し2015年は13.9円と9割の水準となっている。図2、図3のように、2007年から2012年に低下するが、全体的には価格は安定して推移した。2001年から2015年の間、需要曲線は左方シフトし、同時に供給曲線も同程度に左方シフトした。その結果、価格は安定したままで消費が減少したのである。

この間の景気動向は2002年～2008年は「いざなぎ景気」と呼ばれる好況期であるが、消費者、家計には所得の増大感がなく、消費税引き上げ（1989年3%、97年5%、2014年8%）、国債債務の増大（2000年730兆円、対GDP138%、2010年1040兆円、208%）、人口減、年金問題などによる将来不安、さらにリーマンショック（2008年）、東日本大震災（2011年）などがあり消費全般が冷え込んでいた。また、ガーデニングブームは終わり、家庭園芸では花から野菜へと人気が変わった。例えば、国内最大級の春のチューリップ祭りとして有名であるとなみチューリップフェア（富山県砺波市）の入場者は1990年42万人、1992年49万人（史上最高）、2000年30万人、2010年31万人、2015年32万人となっている。2000年代は30万人前後と低迷している（チューリップ四季彩館発表）。このことはチューリップに対する嗜好、人気が失われていることを示唆する。さらに、総務省『家計調査』によると、若者の切花と園芸品・用品に対する支出は2001年から2014

年でそれぞれ 60%、50%の減少となっている。また、少子高齢化や人口減少も花の需要減少に拍車をかける要因となっている。以上のような嗜好における花きにとってのマイナスの変化は、チューリップ球根の需要曲線を左方向にシフト（需要の減退）させる。

ところで、輸入価格（円表示）は世界価格（ユーロ表示）と為替レート（ユーロ→円レート）によって決まる。単純化すると、輸入価格（円）＝世界価格（ユーロ）×為替レート（円/ユーロ）である。によると、2000年代のオランダの球根全体の輸出価格は緩やかに低下している。オランダ貿易統計によると、チューリップ球根について2007年から2015年の輸出価格も同様に低下している⁵⁾。ユーロ（ギルダー）の円為替レートの推移は図4に示されている。2001年から2007年までの輸入価格の上昇は円安によってほぼ説明できる。また2007年から2012年の輸入価格の下落も円高・ユーロ安、2013年からの輸入価格上昇も円安・ユーロ高によって説明がつく。

供給曲線は輸入価格が上昇すれば輸入が減少して左方シフトする。2001年から2007年は輸入価格の上昇による輸入減少が見られた。2007年から2012年の円高は輸入増加要因であるが、リーマンショック、東日本大震災の消費の減少があり、輸入はほぼ一定であった。2013年以降の円安は輸入価格上昇となり輸入の減少になった。さらに、オランダから見ると、2000年代のアジア球根市場では、中国の経済成長に伴いオランダからの中国への輸出が拡大し、日本への輸出は縮小した。これは輸入供給曲線の左方シフト要因となる（オランダの貿易統計によると、オランダのチューリップ球根の日本への輸出は2010年の1億7千万球から2015年1億5千万球へ減少したのに対し、中国への輸出は3千万球から1億7千万球へ増加した⁶⁾。

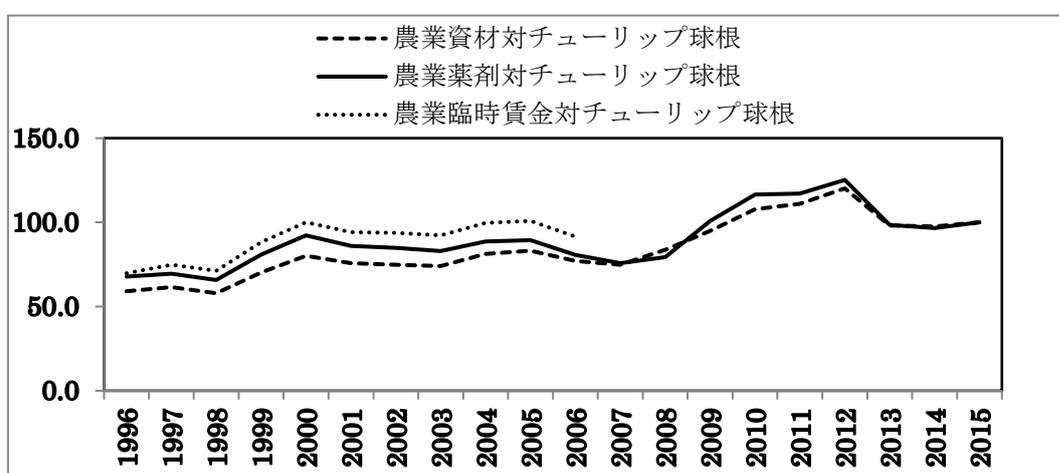


出所：総務省統計局『世界の統計』

図4 オランダ・ギルダーとユーロ為替レートの推移

国内生産供給曲線について考えよう。他の事情が一定とすると、価格が下がると生産量（供給量）は下がる。これが供給曲線である。2001年以降価格は安定しているが、生産量は毎年減少している。生産コストの上昇は供給曲線を左方にシフトさせる。図5にチューリップ球根価格に対する農業資材価格、農業薬剤価格の推移が示されている。また、農業臨時賃金（男）指数の対チューリップ球根価格比が示されている（ただし2006年まで）。これらは2012年まで傾向的に実質コストが上昇したことを示している。これは供給曲線を左方へシフトさせた。

国内供給曲線を右方へシフトさせるには、コスト引下げのために、ネット(網)栽培方式、機械化・ロボット化、スマート農法などの技術革新、インターネット販売やITCを使った経営・流通革新が必要である。



注：それぞれの2015年の価格を100とした。ただし、賃金は2000年が100。

出所：農林水産省『農産物物価統計調査』

図5 農業資材、農業薬剤、農業臨時賃金のチューリップ球根に対する相対価格の推移

富山県の全農家数およびチューリップ球根生産農家数の推移を表1に示した。チューリップ農家数は1993年から2015年で約75%の減である。農家数の減少は資本設備を減少させ、供給曲線を左方シフトさせる。農家減少はチューリップ農家だけで起こっているのではない。富山県の全農家数も2015年は1993年比約60%減となっている。米作を中心とする富山県の農業は傾向的に減少傾向にある。高齢化に伴い離農者が増えている。今農業を行うかどうか、継続するかどうか、後継者が生じるかどうかは農業の将来の見通しに大きく依存する。将来展望が開けなければ、後継者、新規参入者は生じない。チューリップ農家75%減のうち、強いて言うと、60%分は一般的農業問題から減少し、残りの15%分はチューリップから他の作物に転換したと想像できよう。

図2をみると2007年以降、輸入価格は下落傾向であるのに対し、生産価格は上昇傾向である。自給率17%とマーケットシェアを奪われた国内生産者は、珍しい品種やブランド品などの高付加価値商品に生産を集中させている傾向が伺える。

表1 富山県の農家とチューリップ球根農家

	富山県全体				チューリップ球根					
	農家数	指数	耕地面積 ha	指数	チューリップ農家	指数	栽培面積 ha	指数	生産量 万球	指数
1993	57,640	100.0	65,800	100.0	358	100.0	251.6	100.0	6,118	100.0
2001	46,520	80.7	61,000	92.7	215	60.1	203.0	80.7	4,628	75.6
2015	23,798	41.3	58,800	89.4	65	18.2	77.1	30.6	1,671	27.3

出所：農林水産省北陸農政局統計部『北陸農林水産統計』、富山県『とやまの園芸』

VI. 結び

チューリップ球根の輸入自由化が1988年に始まった。その後のチューリップ球根産業の展開は、次のように3つの時期にまとめられる。第1期(1988～93年)は、輸入が増加したが、球根価格の上昇と国内生産の拡大がみられた。これは、需要面では、日本経済がバブル期に所得が増えていること、1990年の大阪花と緑の博覧会が大盛況であったこと、オランダから新品種が導入されたことなどにより切り花・球根の需要が高まった。供給面では、オランダの新しい輸出攻勢、国内生産者の自由化対策により供給が増加した。

第2期(1994～01年)では、輸入が拡大し、価格は下落した。国内生産は減少したが、球根消費(=生産+輸入-輸出)は大きく増加した。需要面では、バブル崩壊後においても、むしろガーデニングブームが生じており、チューリップ球根の需要は拡大した。供給面では、オランダの輸出攻勢は強まり、安い球根が多量輸入された。国内生産者は、稲作同様、農業者の高齢化、後継者不足を抱えており生産者の減少が生じていた。

第3期(2002～15年)では、価格は安定(リーマンショック除く)しているが、国内生産も輸入も減少した。需要面では、長期不況による将来の期待所得が不安であること、少子高齢化・人口減少が進んだこと、花離れ(家庭園芸は野菜へ、若者の花購入の減少)などが要因となり需要の減少が進んだ。供給面では、原材料や賃金等のコスト上昇、技術革新の遅れ、農家の減少がさらに進行していることにより、生産規模は縮小した。そのような中で、国内生産者は大量生産ではなく、珍しい品種やブランド品などの高付加価値商品へ転換していると思われる。輸入では、2007年までは為替レートの円安ユーロ高による輸入減少が生じ、アベノミクスによる円安ユーロ高(2013年以降)でも輸入は減少した。また、オランダの事業者は輸出先を日本よりも成長著しい中国市場へ輸出に転換させていった。

今日、2019年末に発生した新型コロナウイルス感染は世界中に広まり、世界各国の経済はリーマンショック(2008年)を上回る大不況となった。花き市場も大幅な需要減少で

2020年において、婚礼や葬式、各種イベントの花需要はなくなったことにより、切花価格は暴落した。一方、鉢物や球根市場では好景気であった。巣ごもり消費で園芸需要が高まったことにより、球根や鉢物、園芸用品の販売が好調となっている。家庭で好まれるチューリップの花の需要はむしろ拡大し、チューリップ切花生産に使われる球根の需要が伸びている。

コロナ禍では船舶の運航が乱れ、輸送費が高騰した。さらに円安が加わると、球根の輸入価格の大きな上昇が見込まれる。国内生産者からみるとライバルである海外の事業者は苦戦している。一方、富山県では、ネット(網)栽培方法や植付・収穫ロボットの開発・普及が進められている。これにより、大幅な労働時間削減とコスト削減が見込まれている。また、インターネット販売が好調である。コロナ後に、チューリップ球根産業がどのような展開を見せるのか注目したい。

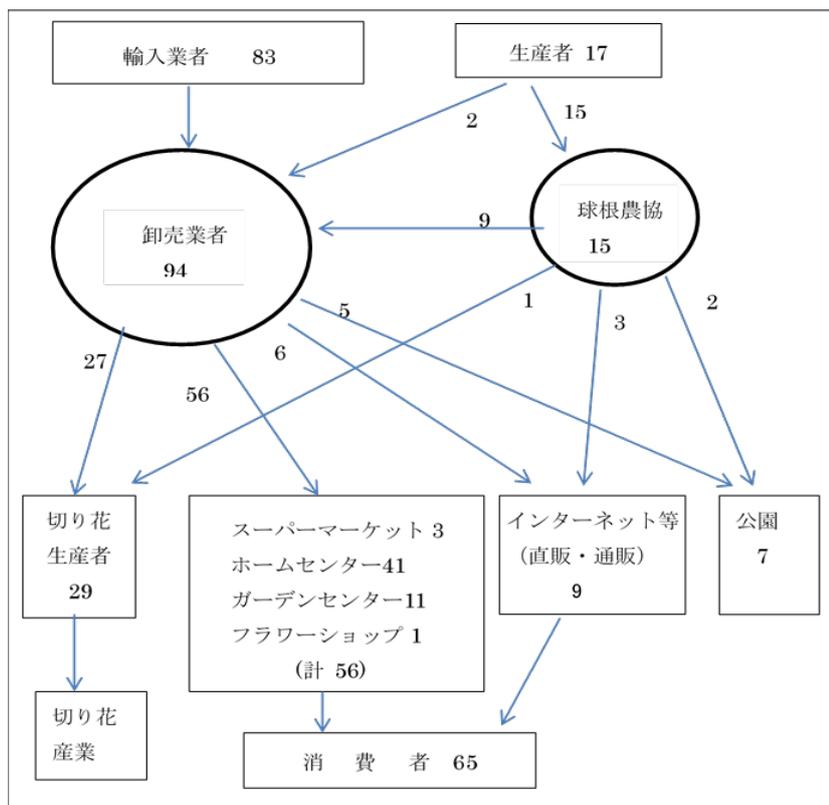
註

- 1) 富山県のチューリップ栽培の歴史は富山県『とやまのチューリップ』を参照せよ。富山県と並ぶ産地である新潟県のチューリップ生産の歴史は木村(2022)を見よ。
- 2) 竹田・新里(2013)参照。
- 3) 本稿の分析は、Niisato and Takeda(2019)に基づいている。
- 4) 新里(2010)参照。
- 5) 新里(2017) p.160。
- 6) 新里(2017) p.94。

参考文献

- [1] 木村敬助(2002)『チューリップ・鬱金香』農村魚金文化協会。
- [2] 竹田達也・新里泰孝(2013)「とやまのチューリップ球根産業—北陸地域政策研究フォーラム 2012年度報告—」『地域公共政策研究』第22号, pp. 108-112。
<http://hdl.handle.net/10110/00019389>
- [3] 富山県観光・地域振興局地域振興課『とやまのチューリップ』。
<https://www.toyama-brand.jp/?tid=100036> 2023年4月25日アクセス
- [4] 新里泰孝(2010)「日本のチューリップ球根産業 1988-2006」『富大経済論集』第56巻第1号 pp. 23-37。 <http://doi.org/10.15099/00021310>
- [5] 新里泰孝(2017)「オランダおよび中国, 日本における花き球根の生産と貿易のダイナミクス」『富大経済論集』第63巻第2号 pp. 143-177。
<http://doi.org/10.15099/00017961>
- [6] Niisato, Y. and Takeda, T. (2019). Causes of decline in the Japanese tulip bulb industry. *Acta Horticulturae*. 1258, pp.141-147.
https://www.ishs.org/ishs-article/1258_20

【コラム1 チューリップ球根の流通経路】

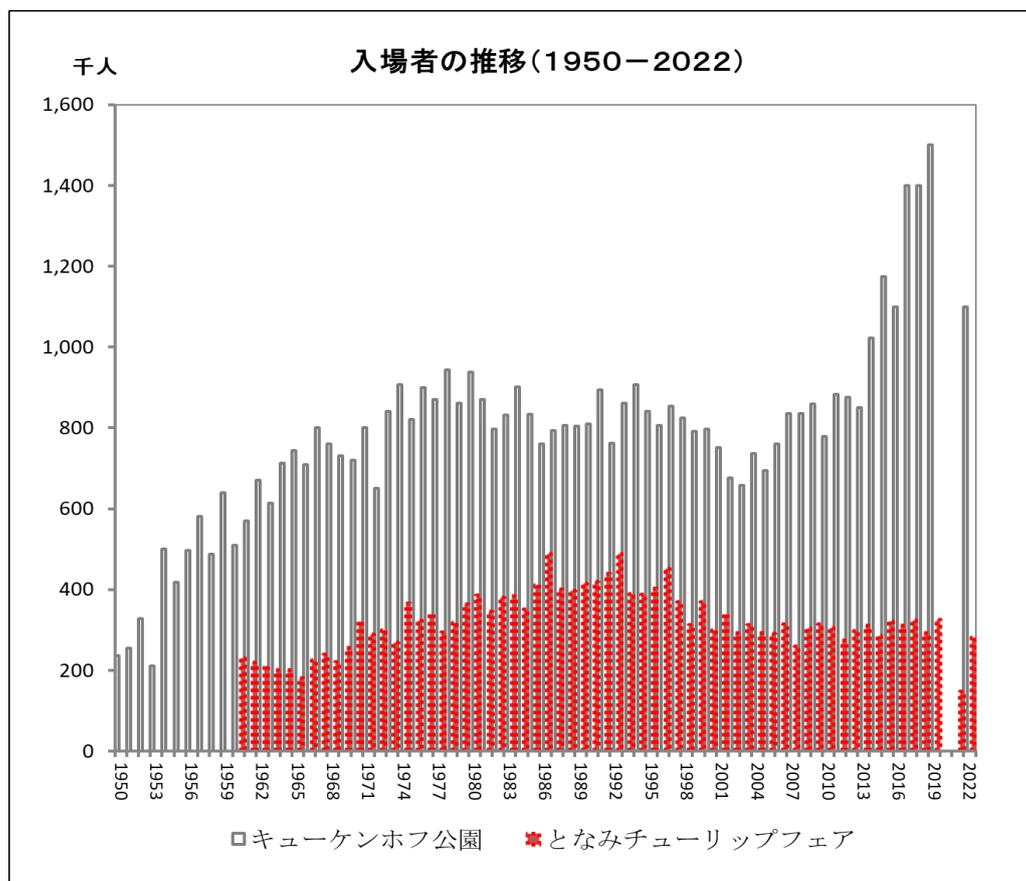


注：数値は2015年の総供給（輸入球133百万球+国産球28百万球）を100とした比率。
 調査方法：富山県と新潟県の花弁球根農協からの聞き取り（2017年9月）および「第4回球根サミット資料2014年2月14日」（『ガーデンセンター』2016年7月号 p.21）

図コラム1 チューリップ球根の流通経路

2017年(平成25年)のチューリップ球根の国産生産量は28百万球であり、輸入球根133百万球と合計すると、161百万球が日本で消費されるチューリップ球根の総供給である。これがどのような経路で消費者に届くのか。その流通経路を示したものが図である、図では、総供給を100とする時の割合で数値を示した。日本農家が生産した球根は総供給の17%である。そのうち家庭の花壇用普通球（ドライ球）が93%で、切り花生産者用の促成球が7%ある。17%のうち15%は球根農協に収められ、2%が卸売り業者に販売される。輸入球は総供給の83%である。輸入球のドライ球が67%で促成球が33%である。切り花生産者は卸売業者および球根農協から促成球を購入している。その量は総供給の29%である。地方自治体などの公園管理者が公園花壇用に球根を購入する。最終消費者はホームセンター（41%）ガーデンセンター(11%)、インターネット(9%)、スーパーマーケット(3%)などから球根を購入している。日本はホームセンター購入が多いが、欧米ではスーパーマーケット、インターネット、ガーデンセンターの割合が高い（それぞれドライ球に対し20%程度）。

【コラム2 となみチューリップフェアとキューケンホフ公園】



注：となみチューリップフェアの1952年（第1回）から1959年（第8回）までの入場者数は不明である。また1961年と1962年のデータも不明であるが、1960年と1983年の数値から補間した。

出所：キューケンホフの1950-1988年はArie in't Veld(1999) "50 Jaar Keukenhof" (Lisse:Keukenhof)p. 103。1989年以降はキューケンホフ事務所で確認。となみチューリップフェアの1960-2000年は、となみチューリップフェア50回記念誌編集委員会(2001)『となみチューリップフェア50年のあゆみ』(砺波市)p. 72。2001年以降はチューリップ四季彩館で確認。

図コラム2 となみチューリップフェアとキューケンホフ公園の入場者数の推移。

春はチューリップ、クロッカス、スイセンなどの花き球根が花を咲かせる時期である。世界各地でチューリップなどのフラワーフェスティバルが開催される。オランダのキューケンホフ公園(Keukenhof)は世界の球根公園として有名であり、世界各地から多くの見学者が訪れる。日本では富山県砺波市の「となみチューリップフェア」が有名である。2つのフェスティバルの入場者数の推移が図に描かれている。キューケンホフの開

園期間は3月中旬から5月中旬までの8週間、となみチューリップフェアは4月22日から5月5日の2週間である。

この2つのフェスティバルは、キューケンホフは1949年に、となみは1952年に生産者団体が球根消費宣伝とその見本市を兼ねた生産振興を狙って始められた。イギリスでも同じ目的で、スポルディングのフラワーパレードが1959年に始まった。しかし、参加者の減少と財政難から2013年を最後に終了した。

キューケンホフの入場者数は1980年頃まで変動はあるが、20万人から90万人程度に拡大した。1990年代はほぼ80万人を維持してきた。1988年以後は減少し2003年には65万台に低下した。これを底に、急速な拡大傾向となり2014年には100万人を超え、2017年は140万人となった。国別では100か国以上。20%がオランダ、40%が周囲の国、アメリカが12万人、中国が9万人。東欧、ロシア、南アメリカが上昇している (<https://keukenhof.nl/en/footer/press/press-releases/keukenhof-concludes-excellent-season/?preview=1&language=en>)。2018年も140万人。2019年に史上最大の150万人を記録した。2020年と2021年はコロナ禍のため休園した。2020年には再開し、入場者数は110万人であった。

となみチューリップフェアは1960年代の約20万人から拡大して、1992年には48万9千人を記録した。1996年まではほぼ40万人を維持したが、減少傾向となり、2011年には27.5万人まで低下した。その後、若干回復基調となり、2015年には32.1万人、2016年31.1万人、2017年32.3万人である。近年は、外国人（特にアジアから）の団体観光客が増えており、2015年8千人、2016年1万人、2017年1万人となっている。内訳では、台湾が4千人、インドネシア1千200人、香港とタイ700人、ベトナム700人、中国とフィリピン400人である。県内、県外の入場者数は記録されていないが、入場者アンケートにより、約25%が県内入場者と推計されている。2018年は29.3万人。2019年は2002年以降では過去最高の32.5万人である、2020年はコロナ禍で休園した。2021年は再開し14.8万人。2022年は28.2万人となった。

オランダのキューケンホフは、ヨーロッパはもちろんアメリカ大陸やアジア諸国から多数訪れる。ある意味では、入場者数は世界の消費需要動向の反映である。となみチューリップフェアは国内入場者がほとんどであるから、日本の消費需要動向を反映している。また近年、中国、アジアにおいてチューリップ祭りの開催が増えている。これは、新たな消費地域の拡大として注目される。

付録：問題

練習問題 選択せよ。

1. となみチューリップフェアはいつ始まったか。
1948年、1952年、1960年
2. 2019年の入場者数は約何人か。
10万、20万、30万、40万、50万
3. 2021年の入場者数は約何人か。
10万、20万、30万、40万、50万
4. 過去最大の入場者数は約何人か。
10万、20万、30万、40万、50万、60万
5. 過去最大の入場者数の年はいつか。
1982年、1992年、2002年
6. チューリップの輸入自由化（隔離検疫の緩和）が始まったと年はいつか。
1985年、1988年、1993年
7. チューリップ球根の国内生産量が最大の年はいつか。
1985年、1988年、1993年
8. チューリップ球根の輸入量が最大の年はいつか。
2001年、2008年、2015年
9. 国産チューリップ球根の2015年の日本市場でのマーケットシェアは約何%か。
20、40、80
10. 「2001年以降2015年まで、チューリップ球根の需要曲線は（ ）方向にシフトし、供給曲線は（ ）方向にシフトした。その結果、価格は一定で、消費量は大きく減少した。」空欄に入る正しい組合せはどれか。
右と右、 右と左、 左と右、 左と右

演習問題

1. 小国モデルにおいて、ある財の国際価格が国内市場価格よりも低い場合、他の事情を所与とするとき、この市場を自由化すると、国内市場価格は低下し、輸入によって消費量が拡大し、消費者余剰（便益－支払）は増える。他方、価格低下により国内供給量が減少し、生産者余剰（利潤）が減少する。しかし、消費者余剰の増加が生産者余剰の減少を上回るため、総余剰は増加する。このことを図解せよ。
2. 自由化と同時に他の事情が変化すると、生産者余剰が増加する場合がある。どのような場合か。作図せよ。
3. 自由化と同時に他の事情が変化すると、消費者余剰が減少することがある。どのよう

な場合か。作図せよ。

4. 安い国際価格で仕入れた輸入業者は国内生産者を駆逐し、国内市場を独占したとする。この場合、国内価格はいくらになるか。また消費量と輸入量はどのようになるか。自由化前よりも価格が高くなることはないか。作図して説明せよ。

5. 1では、輸入は所与の国際価格でいくらでも輸入できるとする水平な輸入供給曲線が想定されている。実際には、輸送や保管、関税・検疫手続きのためにコストがかかり、輸入供給曲線は右上がりとなる。この場合は、自由化後の市場価格、輸入量はどのようになるか。作図せよ。

6. となみチューリップフェアの2019年の入場料（大人）は1,000円であり、入場者は32.5万人であった。2020年はコロナ禍のため閉園。2021年は入場料は1,300円に値上げされ、入場者は14.8万人。2022年は入場料1,300円で、入場者は28.2万人であった。縦軸に入場料、横軸に入場者数をとり、2019年、2021年、2022年の需要曲線と供給曲線を作図せよ。さらに、2023年の入場者数を予測し、図に2023年の需要曲線を書き入れよ。ヒント：供給曲線は水平。

アクティブラーニング課題（グループ学習）

1. 好きな花は何ですか。
2. チューリップを育てたことはありますか。
3. 富山県がチューリップで有名なことは知っていますか。
4. チューリップを県花としている県は、富山とどの県ですか。
5. 2001年以降日本のチューリップ球根産業が衰退・停滞している原因を議論しなさい。
6. 日本のチューリップ球根産業の再生戦略を需要面（消費）と供給面（生産）について提案しなさい。
7. コロナ禍において巣ごもり消費が広がり、園芸ブームが生まれました。今後の球根産業についての展望を議論しなさい。